

# JAELE Newsletter

# 上越英語教育学会通信

*The Joetsu Association of English Language Education*

December 20, 2019

No. 22

## One team! やっぱり「〇〇」と「△△」でしょ!

上越英語教育学会会長  
上越教育大学大学院教授  
大場 浩正(昭和62年度修了生)

このたび、令和最初の上越英語教育学会の会長に就任しました大場浩正でございます。前会長の後を引き継ぎ、これから当学会の会長を務めさせていただきます。前会長および歴代の会長のご尽力に心より感謝を申し上げます。このような大役を仰せつかるには、まことに微力でございますが、役員ならびに会員の皆様のご助言、ご協力をあおぎ、当学会の発展に邁進してゆく決意でございます。どうぞよろしくお願い申し上げます。

さて、皆様にとって令和元年はどのような年であったでしょうか。英語教育関係では、小学校高学年の英語が教科化される前年ということもあり、その準備で小学校現場はとても困っていることや、民間英語検定試験導入の見送りなどが(いくつかの)大きな話題として挙げられるかもしれません。しかしながら、ここではあえて英語教育関係の話題を避けまして、今年の流行語大賞に選ばれた「One team」でも大きな話題になりました、ラグビーのワールドカップについて印象に残っていることがありますので、少しだけ述べさせていただきます。

それにしても日本の快進撃はすごかったとしか言いようがありません。どちらかと言うと「にわかファン」ですが、ラグビーは結構好きで試合を時々見ていました。4年前は南アフリカに勝利し素晴らしかったですが、残念ながら決勝トーナメントには進めませんでした。今年は4年前とは違っていました。新潟出身の「笑わない男」の活躍もあり、ベスト8まで進みました。大会が終了し、テレビやネットのニュースで選手たちのインタビューを聞いたり読んだりする中で、改めて学ばせて頂いたことが2つあります。1つ目は、彼らが多くの事柄を「犠牲」にして結果を残したことであります。やはり、何かを成し遂げる、高い目標をクリアするためには多くの犠牲が必要であるということを改めて学びました。人に与えられた時間は等しく24時間でありませぬ。色々なことを欲張っても中途半端で終わってしまうことも多々あります。自分はどうである

うか。今は難しいですが、自分の若い時代を振り返ってみますと、上教大の院生の時は、それなりにストイックな生活を送っていた気がしています。殆ど院生室か教材作成室（当時は物が何もなくて、とてもきれいでした）で暮らしていました。ひたすら論文を読んだり書いたりしていました。昭和と言えば昭和かもしれませんが、令和の時代でも「犠牲」という言葉を用いて、自分たちの偉業を語ることは素晴らしいことだと思いました。今の自分は、もう先も短くなってきたので、犠牲なんて言葉を使いたくはありませんが、気づいたらそうなっていることがあります。皆さんはどうですか。どう思いますか。そんなの古いですか。

2つ目は、入念な「準備」が大きな成功につながることを改めて学びました。当たり前と言えば当たり前ですが、これがなかなか難しいと常に思っています。ラグビー日本代表の司令塔でもある、田村優選手があるインタビューで語っておりました。ワールドカップ中は練習もしますが、パソコンの前にいることがとても多かったと。対戦相手チームのデータを徹底的に頭に入れるため、頭がパンパンになっていたとも話しておりました。そして戦術も考えなければならなかった。私の中では、選手は次の試合までの約一週間、グラウンドでずっと練習をしているものと思込んでおりました。これも準備と言えば準備ですが、目的に応じた準備という点では不十分と言えるかもしれません。ラグビーではピッチ内にいるのは選手だけです。監督はおりません。事前の対策もあるでしょうが、ピッチ上での最終判断は選手に委ねられているようです。その場、その瞬間をアセスメントし、最高の判断を下していかななくてはなりません。やはり結果を残すためには「準備」が全てと言っても過言ではないと思います。

私たち一人一人が結果を残していくためにどんな「準備」が必要か。私自身、初心に戻って考えてみることにします。令和2年度に向けて、あなたは何のために何を「準備」しますか。



# 半年を振り返って

大学院 1 年 学校教育深化（文理深化英語）コース  
本多 貴紀

数年前、教員免許更新講習がありました。学部生時代はお世辞にもまじめに学校生活を送ってこなかった自分にとって、それは非常に有意義なものでした。教育の本質や意義、課題。何気なく使っていた教科書の 1 文 1 文、1 単語 1 単語に込められた作成者の思い。それらは習ったけれど、残念ながら忘れてしまった（覚えていなかった）のかもしれませんが、教員としての経験を得たからこそ実感できるようになったのかもしれませんが。思えばこの頃から新学習指導要領の施行に向けて「学び直したい」という気持ちが自分の中に生まれてきた。現在、希望が叶い、非常に充実した日々を送ることが出来ているのは様々な方々からのご助力のおかげだと思います。この 2 年間で学んだ事を自分自身の実践や現場に発信していくことが派遣教員としての自分が出来る何よりも大きな恩返しになると信じて日々学問に励んでいます。

大学院では協同学習に基づいたリーディング指導を研究テーマに設定しています。協同学習の理念は教科の垣根を越えて有効に活用することができ、自分自身の実践に生かすだけでなく、他の教科にも発信できるという点で研究した成果を広く還元できるのではないかと考えています。それに加え、主体的・対話的で深い学びの実現や資質・能力の育成にも繋がる可能性をもっていると感じます。英語という教科の特性を学びながら、生徒たちが自分たちの地域や国、ひいては世界をより良い場所に出来るような人材に成長することが出来ればこんなに素晴らしいことは無いと思います。そして、それは現時点で私が教員として目指していきたい理想の姿でもあります。学習指導要領の改訂によって、英語科には大きな変化がもたらされました。受け止め方に個人差はあると思います。しかし、個人的には「英語」というものの魅力や可能性を広げたり、より多くの人たちと共有したり、あるいは私の理想とする生徒たちが育ったりすることができるまたとないチャンスを得ることができたのではないかと考えています。このチャンスを生かすための良い方向性が研究から見つけることができれば良いなと思います。

現場を離れて半年が経ちました。私事で恐縮ですが、学校へは春日山駅から徒歩で通っています。時間はかかりますが、車では見つけることが出来ないものや通ることの無い道を通ります。ゆっくり歩いている、あるいは立ち止まっているからこそ新しい発見が多くあります。現場にいた時は確かに充実感はありましたが、忙しさなどで気づくことの無かった、あるいはそんなことをする余裕もなく、そういった新しい発見を見つけるチャンスを自分から逃していたのかもしれないと思います。自分のために時間を多く使うことのできる今だからこそ気づくことや見えてくること、それが現場に復帰したときに自分自身をまた成長させてくれるのではないかと考えています。気づけばもう半年が過ぎてしまいましたが、そういった新しい発見を一つ一つ大切に、これからも研究に励んでいきたいと思っています。

# 今の自分はどこかな？

大学院 1 年 学校教育深化(文理深化英語)コース

横坂 真優

大学院に入学してからもう半年以上の月日が過ぎてしまいました。周りの友人や現職の先生方、先輩方、先生方に恵まれ、充実した毎日を過ごしています。入学当初から私が心に抱いている目標は、「大学生の時の自分に負けないように頑張る」ことです。この約半年を振り返ると、必ずしも大学生の時の自分に負けずに頑張っていたかという目をつむりたいと感じる部分が多々あります。そんな中でも私が最近まで力を注いでいたことをここに記したいと思います。

今年度から学校実習が始まり、私の所属するゼミでは上越市内の小学校で授業実践をさせていただきました。これから小学校で外国語活動・外国語の授業が本格的に始まる時に、自分には何ができるのだろうかと何度も考えるチャンスとなった実践であったと思います。

この実践を進めるに当たって、新たな出会いがたくさんありました。まずは、大学時代の恩師の紹介で新潟県の PEN の会に所属したことで小学校の現職の先生方や小学校英語評価研究会の先生方に会いました。日々、試行錯誤しながら外国語科の授業を考えている人がいるのだと目の当たりにしました。次に、実践先の小学校の先生方や児童の皆さんです。3年生の2クラスで全14時間の授業実践をさせていただき、形の言いかたを学び、オリジナルのカードを作成して英語で発表をするという単元を担当させていただきました。小学校3年生の児童の皆さんに外国語活動を楽しんでほしいと思い、教科書の内容だけでなく歌や絵本を取り入れた実践をさせていただきました。授業の最初に“お天気 song”と題して、天気を表すジェスチャーをつけた歌を歌うようにしていました。初めは、おもしろいダンスに身を委ねていた児童の皆さんが、回数を重ねるごとに大きな声で歌えるようになり、「まゆ先生、さっきのところ何で言ったの？」

「snowy 覚えたよ！」と声をかけてくれるようになり、とても嬉しかったです。絵本の読み聞かせでは、首をかしげながらもたくさん質問や発言をしてくれたり、英語で色や数字などの表現を伝えようとしてくれてた姿が印象に残りました。

実践の中では、PENの会で学んだルーブリックを実践の中に取り入れ、児童のみなさんが発表に向けて目指すべき姿として、そして授業改善のために使用しました。「指導と評価の一体化を目指す」という表現をよく見かけますが、児童のみなさんにとって身近で分かりやすいものになりたいと思い、イラストをつけたり、拡大コピーをしていつも提示するようになりました。「ルーブリック」という言葉は使わずに、「今日の自分はどこかな？」とタイトルをつけて、形の発音や発表の練習の際に使用しました。ルーブリックを提示してから、児童の皆さんの振り返りシートには、「次はカタカナ発音にならないようにしたい。」「紙を見えなくても発表ができるようになりたい。」というような記述が増えました。

今回の実践で私が使用したルーブリックは、学習者を評価するためだけのものではなく、学習者と指導者が同じ目標のもとに1つの授業を作り上げていくという点において魅力的なツールであると考えています。また、学習のためだけに使用するのではなく、日々の生活の中でふとした瞬間に「今の自分はどうか？」「何を目標にして次は頑張ろうか。」とメタ認知をする癖をつ

けるためにも効果的ではないかと考えています。1つの実践を終えて、「今の自分はどこかな？」と考えると、大学での学びと大学院での学びを結びつけることが少しできた所にいるのかなと思います。実習の相談に乗ってくださった先生、サポートしてくださった院生や学部生の方々、授業をさせていただいた小学校の皆さんや児童の皆さんへの感謝の気持ちを忘れずにこれからも学修に励みたいと思います。

## 学び合いに感謝

大学院1年 学校教育深化（文理深化英語）コース  
町田朋穂

11月の第一週目。ペアを組んだ同期と共に場面分析演習の発表に臨みました。私たちは、外国語における小中連携についての課題から、「音と文字の接続」をテーマにアプローチをしようと考えました。小学校では2020年から、中学年に外国語活動、高学年に外国語科が導入されることになっています。さらに、高学年に関しては、「聞くこと」、「話すこと」に加え、「読むこと」、「書くこと」が新しく導入されます。そこで、小学校学習指導要領解説外国語活動・外国語編において、「読むこと」の目標である「(エ) 音声で十分に慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現を、絵本などの中から識別する活動」に注目しました。絵本は音と文字を同時に提示することができることから、絵本を活用した実践を行うことを決めました。先行研究における従来の絵本を活用した実践は、教師が読み聞かせをするだけで、児童が主体となる活動が行われていないことが指摘されています。そこで、理論的根拠として第二言語習得理論を挙げ、インプット、インテイク、アウトプットの一連の流れを通した活動としてプロジェクト型学習を取り入れた絵本の活用を提案しました。具体的には、高学年による低学年に対する絵本の読み聞かせを通して、読むことに慣れ親しむことを最終ゴールとする活動です。使用した絵本は、“Brown Bear, Brown Bear, What Do You See?”です。主な選定理由としては、リズムカルで、強勢やイントネーションに対する意識を高めることができることが挙げられます。また、低学年に読み聞かせをするという高度な活動に配慮し、内容や英語が比較的簡単であることも選定理由の一つです。当日の討議や協議では、受講生と様々な絵本の活用方法を共有することができ、絵本を活用した授業の可能性をさらに感じました。

二人での発表でしたので、夏休みが終わると同時に準備を始め、授業後毎日のように話し合いをしました。資料提出の期限が迫ると、気付けば朝の7時まで話し合いや資料作成をしていることもありました。私たちが行き詰ったとき、いつも温かい励ましやアドバイスをくださったのは院生室の先輩や友人をはじめとする英語コースの仲間でした。2019年もあと1か月になり、2、3年生は修了が迫ってきました。大学院で先輩方や同期とともに学びを深めることができることに感謝しつつ、残りの時間を大切に、研究や教員採用試験等について学び合いたいと思います。

## 研究室の窓から



清泉女学院短期大学部長  
教授 中村洋一  
(平成4年度修了生)

### 連載第10回（最終回）

#### 言語活動：「コミュニケーション」とことばの機能

新しい学習指導要領で、高等学校英語科目名のひとつが「コミュニケーション英語」から「英語コミュニケーション」に変わった。「英語」と「コミュニケーション」の位置が逆転したのには何か意味があるのか？良く分からないが、英語教育関係ではともかく、こここのところずっと「コミュニケーション」が前面に出ている。しかし「コミュニケーションってなんでしょね」と問われると、答えに窮してしまう。『北の国から』のドラマで、菅原文太さん演ずる、女の子の伯父さんに「誠意って何かね？」と聞かれて困ってしまう、田中邦衛さん演ずる純のお父さんの気持ちになってしまう。分かっていると思っていたことが、本当はよく分かっていなかったりする。

communication って何だあ、とあらためて考える。手元にあった Longman Dictionary of language teaching & applied linguistics には、‘the exchange of ideas, information, etc. between two or more persons. In an act of communication there is usually at least one **speaker** or sender, a MESSAGE which is transmitted, and a person or persons for whom this message is intended (the **receiver**).’ とある。英和辞典を見ると、「伝える【伝わる】こと」とか「伝達」と載っている。何かのメッセージを伝える人と受け取る人の間でやり取りすることかあ…。うーん、分かったような、分からないような…。

今、コミュニケーションってなんだろうとあらためて考えることが必要なのではないかと思いはじめている。コミュニケーション能力と言語能力は包含部分もあるが、必ずしも同一のものではない。そもそも、ことばの機能ってなんだろうか？コミュニケーションにおいて、ことばはどのように機能するのだろうか？コミュニケーションができるようになるってどういうことなのだろうか？アタマの中にたくさんのかがある。

関係があるのかなのか、唐突だけれど、フーテンの寅さんがアヤシげな英語の本なんかをたたき売りしている啖呵売の口上を少し上品に書いてみる。

さて、いいかねお客さん。角は一流デパート、赤木屋、黒木屋、白木屋さんで、紅白粉つけたお姐ちゃんから、ください頂戴で頂きますと、五千が六千、七千、八千、一万円はする品物だが今日はそれだけ下さいとは言わない！

いいかい？はい、並んだ数字がまず一つ。もののはじまりが一ならば、国のはじまりが大和の国、島のはじまりが淡路島、泥棒のはじまりは石川五右衛門だ。

続いた数字が二だほら、二冊こうやってまけちゃおう。仁吉が通る東海道、日光、結構、東照宮、結構毛だらけ猫灰だらけ。憎まれ小僧ができないように教育資料の一端としておまけしましよもう一冊。

産で死んだが三島のおせん、おせんばかりがおなごじゃないよ。京都は極楽寺坂の門前で、かの有名な小野小町が、三日三晩飲まず食わずに野垂れ死んだのが三十三。とかく三という数字はあやが悪い、三三六歩で引け目が無いというね。

どう？まかった数字が四つ！ほら四冊目。四谷、赤坂、麴町、チャラチャラ流れる御茶ノ水。白く咲いたが百合の花、四角四面は豆腐屋の娘、色は白いが水くさい。

ね、どう？一度変われば二度変わる、三度変われば四度変わる、淀の川瀬の水車、誰を待つやらクルクルと。ゴホンゴホンと浪さんが、磯の浜辺でねえあなた、わたしゃあなたの妻じゃもの。妻は妻でも阪妻よときやがった。

続いた数字が六つ、ロクだ！昔、武士の位を禄という。後藤又兵衛が槍一本で六万石。ロクでもないガキができちゃいけないというんで教育資料の一端としておまけしましよこの本。

どう！七冊目。七つ長野の善光寺、八つ谷中の奥寺で、竹の柱に茅の屋根、手鍋下げてわしゃいとやせぬ、信州信濃の新ソバよりもわたしゃあなたのそばがよい。あなた百までわしゃ九十九まで、ともにシラミのたかるまでってやつ。

どう、ね？ほら、これで買い手がなかったらあたし、浅野内匠頭じゃないけど腹切ったつもり！え、ダメか！？チキショウ！まったくねえ、今日はしょうがねえ、貧乏人の行列だあ！まあいいよ、いいっていいって、帰んなさい帰んなさい。

はあ～...ははは...。みんないなくなっちゃったねえ。どう、おじいちゃん。ええ？じっと見てっけど、お孫さんに持ってきたいんだろこれ、ね。いくら見てたってダメ、いくら見てたって、買わなきゃ。ね、そうでしょ？ね？いくら掘っても畑にやハマグリ出てこないっていうじゃないの、どう？田へしたもんだよ蛙のしょんべん、見上げたもんだよ屋根屋のふんどしってね。はい、どう！

「フーテン」は、もとは「瘋癲」と書いたとか。元来は、かなりネガティブな意味を持つ語だったけれど、寅さんのおかげで、「定まった仕事や住所を持たない人」だけど、どこか憎めない、身内にいたら困るけど、外から見れば愛すべきところのある、おっちょこちょいで、面倒見がいい、人間くさいイメージを表す語になったのだと思う。

しかし、だ。この口上。今の若い人におもしろさは伝わるのだろうか？少なくとも、仁吉とか、三島のおせんとか、後藤又兵衛に関わる背景的知识がないと、表面的な「意味」の「伝達」でさえも成り立たないだろう。

自分でも、今、ウェブページを参考にして書き出してみるまで、ずうっと「田へしたもんだよ」の部分は「大したもんだよ」だと思っていた。「田へしたもんだよ」は、「大したもんだよ」と

「見上げたもんだよ」が対になっているパン (pun ダジャレ) の伏線だったかぁ、おもしろいなあ。文字に書き起こすとほぼナンセンスだけれど、口上になれば、語呂とか韻とかうまく工夫されていて、確かに歩いている人を立ち止まらせる力がある。しかし、である。これ、寅さんの口上は「コミュニケーション」と言えるのだろうか？

ある意味、口からでまかせというか、伝えるべきメッセージなんてあんまりなかった口上はさらに続き、寅さんがほんとに言いたいことは、ここになってやっと明らかになって、「買ってちょうだいよ、どーお？」と呼び掛けられる。

はい、どうです、見ていただきましょう！ 先ほど説明しちゃったの、これだけお安くまけちゃうよ？ なぜこんなにお安い品物なのかというとね、本来ならばこれ輸出する品物なんですよあんな。なんで輸出ができないかという、はっきり言っちゃおう今まで言わなかった！ わたくしが知っている東京は花の都、神田は六法堂という大きな本屋さんが、わずか百五十万円の税金で泣きの涙で投げ出した品物！ だからこんなに安い！ 本来ならば文部省選定！ 衛生博覧会ご指定！ 大変な品物だこれ！ これだけ安く売っちゃう。ね？

英語の本なんか見てごらんなさい英語。ずーっと書いてある。ね？ もっともわかりやすいよ。この英語見てごらん、わたしだって読める。どう？ エヌ・エイチ・ケイにマッカーサー、メンソレタームにデーデーデー、こういう、昔の古い英語から出てるんだから。買ってちょうだいよ、どーお？ ね？

文部省選定で、メンソレタームにデーデーデーかぁ...、売れないだろうなあ、この本。コミュニケーションは不成立か ...。少なくとも商売は成立しない可能性が高い。

ことばはおもしろい。「スカッとさわやか」の「スカッと」は **Coke** のコマーシャル・コピーとして作られた日本語の造語で、英語には同様の表現はないと聞いたことがある。英語のコマーシャルでは **refreshing** という語が使われたこともあるようだけれど、やっぱりどうも、スカッとしない。飲み物の (lemon) squash と関係あるのかなあと思ったりもしたけれど、どうもそうではないらしい。外国語散策というウェブ・ページには、「酒を飲み過ぎた後で吐いた事のある人は吐いた後の爽快感を知っているでしょう。別の表現では **sqa** = スカッとすると言います」と、アッカド語の「吐く」という語との関連が書かれていた。確かに、一回吐いちゃうとスッキリして、また飲めたりするので、説得力がなくもない。しかし、「スカッと」の語源や由来を知らない人たちが、「さわやかな」イメージを想起するようになり、このコピーのメッセージが伝達されるのは、ことばへの意味づけが「後付け」となっている例である、とも言える。

「段ボール」ということばがある。どんなものなのかは、説明するまでもないかもしれないが、なんで、「紙を重ねていくつかの層にした板材で、主に包装などに用いられる製品」のことを「段ボール」というのだろうか。YouTube に、イギリス人のダディにカタカナ英語のテストをするというビデオクリップがあり、結構面白いのでたまに見たりしている。その中で、最後までダディがカタカナ英語に相当する英単語を思いつけなかったもののひとつが「段ボール箱」で、いろいろ

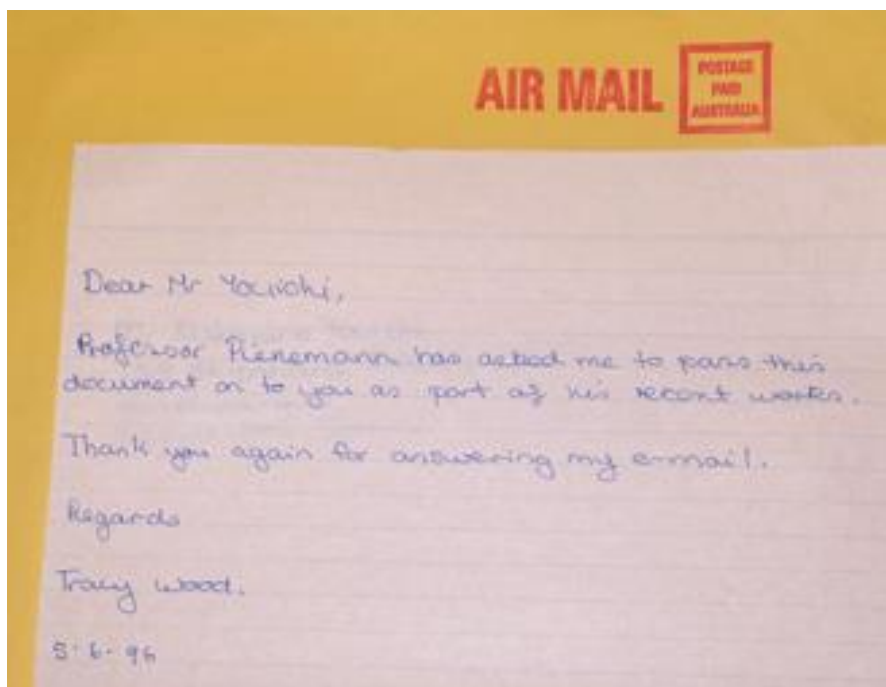


説明を聞いたあと、ダディが答えた英語は ‘cardboard box’ だった。

どうして「段ボール」って呼んでいるんだろうかと思い、ウェブで検索してみた。「このことばを作ったのがなんと日本人で井上貞治郎さんという方なのだそうです。メイドインジャパンだったのですね。... 段ボールの名前は、原紙にボール紙（ボールは英語の board に由来）を用いていたこと。それと、断面の波型が階段状に見えることによるそうです。ただし現在は、ダンボール原紙は古紙を主原料としています。重ねるから段ボールではなかったのです。」ということが分かった。井上貞治郎さんは「段ボールの父」と呼ばれているそうだ。分からなかったことが分かると、スカッとスッキリする。ことばにもお父さんがいて、ちゃんと面倒を見てくれるのだ。お父さんはえらい。

大学を卒業して、高校の英語教師として働き始めた時、英語の教え方とか生徒との接し方などについて分からないことだらけで、なんだかいつもモヤモヤしていて、いろいろな本を読んだ。まだ結婚もしていなかったのに、新刊図書を紹介するチラシの端に宣伝があって偶然目に留まった『母の友』なんていう月刊誌を定期購読していた。子育ての記事や子どもの側に立った考え方などの記事が、思いの外いろいろなヒントを与えてくれた。その雑誌を通じて、灰谷健次郎さんや今江祥智さんの児童文学を読み、小宮山量平さんという優れた編集者が長野県上田市のご出身だと知って、うれしくなったりしていた。ただ、たくさん読んでいくと、どんどん分からないことも多くなり、もっともっと色々なことを知りたくなって行って困ったりもした。

修士論文の準備をしている時、どうしても読みたいのに、日本国内のどこの図書館にもない論文の存在を知った。なんとしてもそれが欲しくて、著者の Manfred Pienemann のことを、日本



で立ち上がったばかりのインターネットで調べ、Australian National University の Department of Modern European Language の所属であることを突き止め、その住所を見つけた。ほぼストーリーに近い。今のシステムならすぐにとどり着く情報を得るのに、かなりのエネルギーと時間を使ったことを覚えている。

ダメモトで、「どうやったらあなたの論文を手に入れることができるでしょうか?」と、snail mail を送ってみた。しばらくは何も起こらず、忘れかけていた時、なんと、そのすぐ後に出版された “Teachability theory” という本の A draft paper of a chapter of the forthcoming book を含

む何編かの論文のハード・コピーが、オーストラリアから航空便で送られてきた。自分でお願いしたのに、正直、本当に返事が来るとは思わなかったもので、かなりびっくりして、感激した。「求めよ、さらば与えられん」というのは、こういうことかと思った。その後、修論を完成させ、お礼を添えて Professor Pienemann に送ったら、今度は、Tracy Wood さんという若くて美人の助手の方(そういうふうな情報はどこにも書いてはなかったけれども、きっとそうだと思う...)から、  
“Professor Pienemann has asked me to pass this document on to you as part of his recent works.” との手紙を添えて、‘Toward a theory of Processability in second language acquisition’ (March, 1994) という、これも後に Processability としてまとまった考察の本になったドラフトを送ってもらった。雲の上の研究者に想いが届いたのか、直接お目にかかったわけではないけれど、なんだか、話をしてもらっているようで、とんでもなく嬉しかった。可能性はかなり低いとしても、もし自分が求められる立場になったら、こういうコミュニケーションへの対応を、是非見習おうとも思った。

修了してからも、長野の田舎では手に入りにくかった英語の文献をなんとか取り寄せて読んでいた。リスニングテストへの取り組みが検討され始めた時、Rost (1992) を読み返してみたら、またわからないことが書いてあった。“... Two examples of norm-referenced scales (the Interagency Language Roundtable Language Skill Level Descriptions and the ACTFL Provisional Proficiency Guidelines) are provided in Appendix 7D and Appendix 7E.” (p. 187, l. 12-15) このふたつのスケールは、norm-referenced ではなくて、criterion-referenced ではないかと、何度読んでも納得がいかなかった。それで、またストーカーになり、住所を見つけて手紙を送った。1996年9月21日付けの手紙のコピーが手元に残っている。CEFR が公表される5年前のことだった。返事は e-mail でやってきた。白か黒かの返答ではなかったけれど、norm-referenced として解釈すべき理由について、丁寧に説明があった。その後 norm/criterion と standard setting を考え続ける出発点になった November 16, 1996 の日付が入ったメールのコピーは、送った手紙と一緒にその本に挟んで本棚に置いてあり、2008年に来日された Rost さんに東京でお目にかかるチャンスを得て、その本の表紙の裏にサインをして貰った。この手紙のことを話したら、薄々だけれど、覚えておられるようだった。自慢話のようなことばかりで、スママセン...。そうそう、「コミュニケーションとことばの機能」でした。

池内 (2010, pp. 144 - 147) は「ひとのことばの起源と進化の問題について、言語学・生成文法の立場から概観、解説、提案 (p. v)」をしている。(上教大在学中、池内先生には、Case Grammar に関する、絶版で入手不可能だった文献をいくつかお借りしてお世話になりました。) まず、ことばによるコミュニケーションを、「(10) 話し手と聞き手の間でことばによる情報や意思の伝達・交換が行われ、それによって相互理解・共通理解がなされる、あるいは図られること。」と定義している。さらに、ことばの行為の分類一覧を引き、(11) に8つあげ、相互理解・共通理解が成り立つことに焦点を当てるとすれば、(10) の定義に合う「コミュニケーション」はせいぜい✓(筆者の追記) のある3つぐらいであると指摘し、「私たちの言語行動には、しばしば言われるほどには、(10) のコミュニケーションに該当するような行為はないというのが分かります。すなわち、ことばの主たる機能はコミュニケーションであるとは決して言えないのです」と結論付けている。

- |                       |   |               |
|-----------------------|---|---------------|
| (11) i. 何かを指し示すこと     | ✓ | (12) 裁判での弁論など |
| ii. 自然現象（事実）の記録       |   | 依頼・命令・注文      |
| iii. 思考の表現            | ✓ | 意見陳述          |
| iv. 創造的想像             |   | 質問・応答         |
| v. 他人を操作すること          | ✓ | (報告)          |
| vi. メタ言語的機能           |   |               |
| vii. 詩的機能             |   | (13) 講義・講演    |
| viii. 交感的 (phatic) 機能 |   | 授業            |
|                       |   | ニュース、新聞記事     |
|                       |   | 井戸端会議・おしゃべり   |
|                       |   | 思考            |
|                       |   | 創作（小説、詩など）    |
|                       |   | 独り言           |
|                       |   | ブログ           |

(12) はコミュニケーションと言える日常的な言語行為の例、(13) はコミュニケーションにはあたらない例であるとしているが、同書 (p. 148) でも言及しているように、「なんでもいからことばを発したらそれはコミュニケーションである」と定義すれば、上で挙げた言語行動のほとんどが（独り言などを除いて）コミュニケーションに該当する」ともいえる。重要なことは、コミュニケーションの検討をする時に「同一の定義に拠って議論することが大事」(p. 148) という指摘である。

さて、我が国の英語教育は、同一の定義で「コミュニケーション」をとらえているだろうか？「なんでもいからことばを発したらそれはコミュニケーションである」でいいのだろうか。もし、池内の定義に拠るとすれば、ことばの主たる機能はコミュニケーションにはなく、「英語コミュニケーション」だけでは、英語のことばの機能の大部分を教えていないことになり、片手落ちであると言わざるを得ないのではないか。「コミュニケーション」に振り回されている場合ではなく、ことばの「主たる機能」にきちんと目を向け、どの学習時期に、どのようなことばの機能を身につけるのかを慎重に検討し、英語教育の方向性を再度検討すべきなのではないだろうか。

スピーチや、リーディング、リスニング、プレゼンテーション、おしゃべり、作文、日記が、一方通行的であるが故に「コミュニケーション」ではないと定義するとしても、ことばの主たる機能に含まれるものである。思考も、聞き手を想定しない独り言も、ことばが必須の立派な言語活動だ。さしずめ、寅さんの口上の前半は詩的機能を持つ講義、あるいは独り言でもある。

これを書き始めたころ、ここでも何回かその問題点に触れてきた、大学入学者選抜における外部検定試験の導入が唐突に延期された。この制度の発端には、4技能、特に英語によるコミュニケーション能力のパフォーマンス・テスト導入により、日本の英語教育に、プラスの Washback を及ぼそうという考えがあったと理解している。しかし、「コミュニケーション」と「ことばの機能」の関係を、今一度立ち止まってよく考えてみると、その方向性の基盤に少なからず疑問がわいてくる。ことばの教育の目的は「齟齬のないコミュニケーションの成立」だけではないのではない

か。「身の丈にあった…」という発言を聞いたり、堰を切ったようにその発言を攻撃する記事を読んだりして、「何が正しいのかなあ、何がいけなかったのかなあ、これからどうしたらいいのかなあ？」などと考えて、「いろいろ考えなきゃいけないこと、いっぱいあるよなあ…」などと、小さな声で独り言をつぶやくといったプロセスが、もしかしたら、言語活動の根源的な部分にあるような気もする。外部検定試験の導入もそうだが、日本の英語教育は、その方向性の舵取りを考える議論の何回目かの出発点にいるのではないかと思う。ことばの主たる機能をどのように教育し、その成果を測定して評価するのか、再度、慎重にそして真摯に検討する必要がある。「言語活動」におけるコミュニケーションとことばの機能について、あらためて考えることで、今、我が国の英語教育に必要なことが見えてくるのではないのだろうか。もののはじまりが一ならば、議論のはじまりは、ことばの機能だあ！

男はつらいよ 第7作 奮闘篇で、これからものがたりが始まるというシーンで、旅から帰る寅さんをからかったおいちゃんにつむじをまげた寅さんが「俺はもう二度と帰ってこねえからな。夏になったら鳴きながら、必ず帰ってくるあのツバクロさえも、何かを境にぱったり姿を見せなくなる事だって、あるんだぜ。」と心にもない啖呵を切る場面がある。「それをいっちゃあ、おしまいよ」的な場面である。

「おしまい」ということばも、また興味深い。『大辞林』第三版の解説によると、「おしまい」は、「御仕舞い・御仕舞・御終い」とも書き、① 終わること。済むこと。② 物事がだめになること。③ 売り切れ、品切れ、という意味である。「研究室の窓から」は、筆者（私のことです、念のため）が、もうおしまいだあ、なので、第10回の今回をもちましておしまいとさせていただきます。書いている本人が一番楽しませていただきました。貴重な機会を与えていただきました飯島編集長はじめ事務局の皆様、また、こんなオマヌケな駄文を読んで下さった皆様にお礼を申し上げ、最終回の結びといたします。ありがとうございました。

#### 参考文献

Rost, M. (1992). Listening in language learning. Longman.

池内正幸. (2010). 『ひとのことばの起源と進化』. 開拓社.

Longman Dictionary of language teaching & applied linguistics

啖呵売の口上: <<http://dear-tora-san.net/?p=173>>

外国語散策 「スカッと」:

<<https://hetakes0.hatenadiary.org/entry/20170422/1492854236>>

「段ボール」「おしまい」: 三省堂 大辞林 第三版 電子版 <https://www.weblio.jp/content/>

カタカナ英語のテスト: <<https://www.youtube.com/watch?v=PbG7Dlt69M4>>

段ボール: <https://www.rengo.co.jp/history/inoue/page1.html>, <https://www.yuraimemo.com/274/>

[yuraimemo.com/274/](https://www.yuraimemo.com/274/)

## 編集後記

上越英語教育学会は大場新会長と共に令和という新たなステージに入りました。筆者が院生時代、何人かの先生方が印象に残っている先輩方の逸話を授業の内外でお話ししてくださいました。その中の一人が北海道の「0」先輩でした。先生方のお話から、0先輩は大変、研究熱心な方であり、ぎりぎりまで自分を追い込んで研究されていたことが推察されました。ストイックな生活をされていた0先輩が大学院修了後も研究を続け研究者となり、上越英語教育学会の新会長になられたことは、本学大学院OBの一人として喜びです。

0先輩に負けず、逸話が残っているのではないかと筆者が推察する修了生の一人が、本号をもって、連載終了となる筆者の同級生である中村洋一先生です。前号の編集後記でも中村先生について触れましたが、今回の連載記事の中で述べられている逸話を讀むと、学会を立ち上げる行動力が随所に現れていることを感じました。連続10回にわたる連載をお引き受けいただきましたが、過去のどの記事を読んでも中村先生が時間をかけて準備してくださったことが行間に滲んでいます。学部長としての多忙な日々の中で、本ニューズレターのために時間を割いてご準備いた

いただきましたこと、深く御礼申し上げます。

これからも、皆様のご協力を得ながら、このニューズレターが学会員の交流を活性化し、研究意欲に刺激を与える一助になるよう努めたいと思います。(編集委員 H. I.)



---

2019年12月20日発行

発行者 上越英語教育学会

ニューズレター編集委員会

北條礼子 (上越教育大学)

野地美幸 (上越教育大学)

飯島博之 (埼玉県立大学)

---